



TITLE:

[特別講演]原因と結果のニワトリと卵のような関わり

AUTHOR(S):

川田, 靖子

CITATION:

川田, 靖子. [特別講演]原因と結果のニワトリと卵のような関わり. 仏文研究 1998, 29: 157-169

ISSUE DATE:

1998-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137870>

RIGHT:

原因と結果のニワトリと卵のような関わり

川 田 靖 子

みなさん、こんにちは。大勢ご参集くださいましてありがとうございます。先程、非常に真面目な研究発表を聞かせていただきまして、ひとしお感銘深く、学生時代が懐かしくなりました。また、すぐ上の先輩の方々、もっと上の偉い先輩の方々、それから一級下の本当に仲良しの方々、お見え下さいまして、私はだんだん喋るのが具合が悪いような気持ちが出てきます。去年のお誘いの折りには「あまり迫っているからごめんね、来年来年。」とその場逃れを言ったのですが、なかなか忘れて下さらなくて、今度は早々とお声をかけて下さり、もう逃げ切れませんでした。もっと立派な諸先輩方がいらっしゃるのに、と思ったのですが、廣田先生のご指名とお聞きして、ますます断れなくなりました。

廣田先生は、ブルシエの同期で、パリで時々お会いしました。ある時なんかは、町で出会ったときに、「これからオート・ゼテュッドへ行って、バルトとビュートルの対談を聞くんだけど、アンタも行かない？」とおっしゃって、「うん、行く行く！」と、そのままついて行ったことがありました。またある時は、ヴァヴァンの近くでお茶を飲もうということになって、「手相を見てあげるよ！」なんておっしゃったんですよ（一同笑）。そうして更に、「あなたの結婚は、とても一度ではおさまらなくて、二度か三度かするよ。」とおっしゃるものですから、私も半信半疑、それもまた面白からずや、なんて思っていましたけど、全然当たらないわけですよ（笑）。ですから、若くてハンサムな廣田先生に手なんか握られてまんざらでもないし、ニコニコしてたけど、全然当たらないんだから、今日のご指名だとしてもしかすると、当たらないかもしれない、と思いますが、一所懸命に話をします。

まず、この講演の題名が怪しげで、「何やろう？思うて来てみたわ。」と加藤林太郎先生は、おっしゃってくださいますけれども、「卵とニワトリ」というようなしまりのない題名で、まったく申し訳ないです。でも、まさか私ごときが「私の歩んだ道」なんて気の利かない題名もつけられないし、一番いいのは対談形式だと思うんですね。例えばベルナール・ピヴォやマドレーヌ・シャプサルみたいな人の対談は本当に面白いです。対談のノウハウというのは、日本では集大成されたものが本当にないから、それをやればいろいろな研究に役立つかもしれないし、フランス文化というものの核心に触れる面があるんじゃないかと思うのです。まず解題からお話ししますね。

今自分がここにいるということは、その拠って来るところを考えると、元に卵があって、その

卵がどこから来たかという、ニワトリがいて、そのニワトリがどこから……となると、その向こうに卵があつてと、連綿とキリもなく続いているんですね。で、私は昭和九年の生まれで、その前年に滝川事件がありました。実は、その事件の時に私の父は農学部で助手をしておりまして、あの時に辞めたのは滝川先生だけではないですよ。滝川先生は勇ましいことを言って、辞表をたたきつけておやめになったんだけど、私の父などは（当時は鳩山文部大臣だったわけですが）、無給の助手七人の連名で、「警察が大学に入るとはけしからん！」と、掲示板に張り出しまして、その日のうちにクビになったんです。無給の助手をクビにするというのも面白いですが、そのやり方がまた振るって、「クルニオヨバズ」と電報が来たらしいです。もう京大には来られないから、奈良女高師へ参りまして、そこで私の母に出逢って、その翌年に私が生まれたんです。かなり手っ取り早く出てきたわけです（笑）。

でも皆様、どうぞご心配なく。私の一代記をやるつもりはございませんので。かたい話ではありませんが、ひとまず、大事な二本の柱を建てようと思います。まず一つは研究・教育ですね。研究が教育に及び、また教育から研究が求められていく、ということなのです。今、私が何をしています、どうしてそうなったかという話が、一本目の主軸になると思います。例えば、これが一本の木の地上の部分だとすれば、私の地下の根の部分は、おそらく詩を書くことにあるだろうと思っておりますので、二本目の柱としてそれにほんの少し触れたいと思います。この二本の柱の間に、ニワトリと卵のような関係があるかもしれないし、あるいは、研究と教育の間にも、同じような関係があるのではないかと思うのです。

私の研究者としての出発点は、やはり京都大学にあると考えます。私どもの学生時代と申しますのは、京大仏文のベル・エポックとでも言うべき時代でありました。まず伊吹先生、生島先生、桑原先生、その御三方が元気にご活躍中でした。そのちょっと年下に、本城先生やら大橋先生がいらっしゃいました。もちろん学問的にも充実した学校でしたが、私どもの学生生活にもなかなか面白おかしいことがありまして、一緒に野球をしたり、進々堂に屯していろいろ議論をしていたのです。小佐井先生なんかも、あの頃は若くてハンサムで、野球に出てきましたよ。助手をやっておられましたけれどもね。

それ以上に当時は乱世でした。60年安保の年でもありました。私たちも、樺美智子さんが亡くなった時、授業放棄をする計画で、みんなして伊吹先生の研究室に押し掛けて議論をしました。宮ヶ谷君が音頭をとって、授業放棄を認めると先生に言ったのですが、伊吹先生は、「認めるわけにはいきません。みなさんが来ないのは自由ですけど。」とおっしゃいました。その日、みんなは学校に来ませんでした。二人だけ来ました。私と一期上の柳谷巖大兄でした。みんなには保守反動なんて言われたんですけど、私としては、そうじゃないと思ってました。今だから言うのではないですけども、私は、気に入らない政治をやってるから学校に来ない、誰かが死んだから学校に来ないのは理に合わない。本当は岸とか皆殺しにしないとよくならないと思ってた。穏やかじゃないけれども。それができない以上は、私たちがうんと勉強して、あの人たちを皆どこかさなきゃならないと思ってたわけですよ。だから、学校があつたってなかったって来るんですけど、来てみたら二人しか来てなくて、文閲で勉強して帰りました。その二人がまた、玉川大学で

一緒に今年までやってるんだから、なんか妙な因縁だなという気がいたします。

研究の話ですが、17世紀のサロンのことを今調べていますが、私の関心の源がどこにあるかと言われれば、ブルーストだと思うのです。冒頭のスワンの巻に、ヴェルデュラン夫人のサロンが出てきますね。それからゲルマント公爵夫人や、いろいろなサロンが出てきます。そのサロンで行われていることに大変興味を惹かれました。サロンがどういうものなのか、非常に気になりました。日本には当時あのようなものがなかったと思いますから。本当にどんなものなのだろう。素敵なものという気もするし、人が集まって話をするといってもどういう話をするのかしらと思っていました。その集まり方も、話題も、そこでの遊びも気になりました。メンバーの力関係もさっそく出てまいりました。シャルリュスがサロンから排除されますが、スワンもヴェルデュラン家のサロンから排除されるわけですね。その力関係は何に拠るのか、ということにも興味がありました。その場で行われる論争みたいなものも面白いと思いました。ですけれども、学生時代は若かったから人物たちの恋愛の方に目がくらんでたわけです。男が女に振り回されたり、女が男に振り回されたりするとは一体どういうことなのだろうか。しかも苦しい目に遭わされれば遭わされるほど、いっそう惹きつけられてゆくのはなぜなのだろうか、別れてしまえばいいのにな、と思って読んでいましたが、そのメカニズムが非常に知りたいと思いました。だいたい苦痛というものには、分量だとか強さというものがありますわけで、私は病気をしましたので、痛みがだんだんひどくなって、その痛みにもうができて、そこからその痛みをどうやってやりすごせばよいか、一晩中、数を数えたり、いろんなことを考えたりしながら、痛みが深くなったり浅くなったりするのを見守っていた時期があったものです。ですから、苦痛というものを計量したい気持ちが強くあったのです。そういうお話を伊吹先生にいたしました。京都大学が優れてるのは、先生の手余るような課題を抱えて学生が頼ってきたときに、「守備範囲が違うからそんなものはやめなさい。」とおっしゃらないことですね。「そういうのは、文学じゃないよ、マージナルだよ」ということもおっしゃらないわけです。「アナタの考えてることをやろうと思ったら、私のところでは手に余るから園原先生のところに行きなさい。頼んであげるよ。」とおっしゃった。それで園原先生のところへ行きました。「私はこういうことに興味があります（それ以外に自殺願望もあったのですけれども）。痛みとか苦しみがどういうメカニズムになっているのかを何とか解明したいのです。それを自分の場合だけではなく文学作品の中からいくつかシチュエーションを、（百ほど）集めて、その中から、どういう軸でもって人間が苦しむかということを知りたいのですが、そんなことができるでしょうか。」そして、「そのようなことができたとして、それが科学と言えるのでしょうか。」と言う話から始めました。そうしましたら、「大勢の人の意見をきいて、その人たちがこのくらいの苦しみだと判定すれば、その一人一人の考えを集めたものは一つの物差しになる。それは一つの科学と言えるね。」とおっしゃって下さいまして、大学院のドクターの学生を指導員としてつけて下さいました。

私は文学作品の中で、ブルーストとコンスタンとスタンダールの三人が対照的であると思い、各々の作品の中から100ほどの状況を引っぱり出しました。友達にだいたい迷惑をかけながらそのややこしいアンケートを実施しました。で、そのアンケートを元にして距離分析にかけてゆくと、

軸が出てくるわけです。(恋愛の苦悩の第一の軸に〈所有と喪失〉が出てきたときは、当然とも思い驚きもしました。実際には、何も所有なんかしていないのに。)さらに、それぞれの状況を a と b の座標にあてはめ、b と c の座標にあてはめ、という風にすると、(次元は数学的には無数に考えられるわけですが) 三人の作家の用いた状況群が色分けされ各軸の上での分布がわかります。それらをクロノロジックにつないでゆくと、部分的にせよ、ブルーストの星座表みたいなものができます (パターン分類)。こうしてコンスタンのもスタンダールのもできるという考えでした。そして、それをやりました。でも伊吹先生はなかなか認めて下さいませんでして、「アンタのやったことは、園原先生はほめてたけれども、ホンマに本格的な研究なのか。」ということをして、たびたびおっしゃいました。私も立つ瀬がないので、文学研究の正統派の論文と、それから園原先生のところでやった論文とを、両方重ねて後者を副論文にして評価していただくという形をとったわけです。(これは学会誌「フランス文学研究」1961年号に発表されました。)

ところで今はコンピュータでやれば自宅でもできるし誰にでもできるのですけれども、その当時は、私のやったような複雑な計算ができる計算機は、文学部の中では心理学の研究室に一台しかなかったんです。たまたま運良く計算機を使う人が少なくて、私はその計算機を使わせてもらって日夜励みました。間に合わなくなってからは、泊まり込みで一月くらいチクチクやっていたら、とうとうその計算機が壊れちゃったんです。その機械というのは、今から考えるとバカみたいな値段かもしれないけど、500万したんです。40年近く前で、東芝や日立の初任給が8000円の時代なんですよ。ですから、私が一生働いたって返せない金額なんですね。もう私は真っ青で園原先生のところに走りまして、「実は大変なことをしてしまいました。……というわけで壊れてしまいました。」どんなに怒られるかと思ったの。そしたら園原先生は「ワッハッハッハッハ! 壊れるほどやったのか! エライ! エライ!」と言って下さったのですよ。私、本当に涙が出てきたの、今思い出しても涙が出てくるの。私、この先生のためならなんでもすると思った。まあ、今、五億円の機械を壊してそんなに言って下さる先生あるかしら。すごくうれしかった。(幸い、すぐなおして下さいました。) そういうことがその学校の学生を大事にするとか、研究するひとを大事にするという風な姿勢に、繋がるのではないかと思いました。その時に、自分の考えをもとにして、やりたいテーマに取り組むと言うことがどういうことかがわかってきて、それが面白くてたまらなくなって、結果が出てきたときには本当にうれしくて、一週間ほど足が宙に浮いているみたいでしたね。こんな喜びがあるんだから学生にも教えない手はない、と思ってフランス語科を玉川大学につくって以来、卒論というのは今でもずっとやっています。選択ではなく必修で卒論を書かせる数少ない大学となってしまいましたけれども、これをやめたい先生もいらっしゃるわけです。だけど私、あんなに面白かったことは一度でも味わわせてあげたいと言う気持ちがあるのね。力に応じて一人一人ができる形でやらせたい。もちろん私たちの時はほっとかれたわけですから、なんだかもう胃が痛んで苦しんじやったけれど、胃が痛んで吐いているうちに血が出て来ちゃって、これは穴が開いたかもしれないなと思いました。大学病院に行ったりしたら、「穴があいてますから卒論は中止しなさい。」と言われると困るから、穴が本当に開いて、もう身動きがとれなくなるまでやってやれなんて思ってたなら、提出した日になおっちゃったんですよ。

何でそんなに苦しんだかという、書き方がわからないからなんですね、そんなことで胃が痛むなんて実にばかばかしいことだから、今の学生にはちゃんと方法を教えます。いざ書き出したら左から右へばっかばっか書けるように育ててます。そうなるまでが大変なんですね。毎時間毎時間読んだかとか調べたかとかうるさいことを言って、かなりの時間が取られるわけですけど、そういうわけで卒論は今でも続いています。ちょっと教育の問題にそれてしまいましたけれど、今言った苦悩の分析というのはそれはそれで面白かったのですが、やっぱりサロンのことが気になって、結局スワンの恋の巻でスワンがオデットと恋愛してしまうためにサロンから排除されますね。ということはどうもサロンの中では女主人を中心として、全員が平等でなくてはならないという力の関係があるからじゃないかっていうふうに思うのです。内部に核ができたりするとまづいんですね。恋愛は御法度みたいなところがあって、結局恋愛にいつまでもかかづらわっているのはサロンのことはわからんぞ、と思って途中からサロンそのものへと向かっていったわけです。

恋愛以外は何をしていたのか、というのがまた問題なんですね。サロンというのが女主人を中心とする一つの共和国みたいなものなのだから、その中でみんなが平等で対等な関係でなにをするかという、やっぱり遊んだり勉強会したり論争したり、ということになるんでしょうねえ。それで私はいきなり17世紀へととんだのですが、18世紀をなぜとび越したかと言えば、成瀬正一さんの『フランス文学研究』というのがあります。その中にかなり18世紀のことが書いてあって、それは面白かったんだけど、もうちょっと前の方はあまり文献もないし、そっちの方をやってみようと思って、タルマンあたりからチクチク掘り起こしていくと言う感じだったのです。あとひとつの宝の山は、ヴォワチュールやセヴィニエ夫人などの手紙です。どうやらランブイエ侯爵夫人が創始者であるらしいと言うことがわかってまいりまして、この人は宮廷女性として非常に重んじられていたわけですけど、宮廷というのは上下関係もあって肩苦しいし、自分も名門の出身で宮廷で大事がられたって、何ほどのこともないと早く悟っていたのですね。体の具合が悪いなどの口実でさっさとやめちゃって、もっと横の関係の、本当に人間の一人一人が共和国をつくるような対等な関係を自分の邸で作ってきた、ということが最終的にわかってきたわけです。恋愛以外のどのようなことをやっていたか。17世紀のサロンというのは、どうもお遊びが中心になりまして、18世紀の方に比べると、テーマというのがとくにないわけですよ。18世紀の方は思想的なサロン、哲学者のサロンなんていうのがあって、そこで本当にフランス革命の理論というものが醸成されていった、大きな醸成の樽のようなものであったということがはっきりするんですけど、17世紀は、そのように合目的ではないんですね。私は目的があるっていうのは嫌いな。なにか目的があって、そっちへしこしこと、それだけでは嫌でね、キャンペーンがあって誰もがそっちの方へ行けば、皆どどどっていくっていうのが本当に嫌でね、だから誰もやっていないから、別にせかされもしないし比べられることもないから、と思ってコツコツつついてたんですよ。そのなかで、遊びというのがあって、まあ悪戯だとかジョークだとかたわいのないことをやってるんですけど、なかなか楽しい会話をやってたんですね。言葉遊びもあるし、お手紙の書きっこをしたりしてて、私は本を書きまして、その中で紹介したんですけども、どんなことだったか二三言いますと、タルマンの中に出てくるキノコ騒動というのがありまして、ある秋のはじ

めに、ランブイエ侯爵夫人のところのサロンの常連たちがランブイエのお城に招かれて行くんですね。秋は狩りのシーズンで狩りの獲物と旬のキノコをたくさんごちそうになる。ギッシュ伯爵っていうのが（デュマの『三銃士』の中に出てくるあの悪玉のモデルなのかどうか、同一人物なのかどうかわからないんですけど、）田舎からポッと出の若い殿様なのですが、世間知らずで皆から鴨にされてむしられているんです。この人も茸が大好きでパクパク食べてました。寝てしまうと、彼の脱ぎ捨てた服や胴着をランブイエ侯爵夫人が持ってこさせて、大急ぎでどこもかも2センチずつ縫い縮めさせた。翌朝、起き出でたギッシュは服がはまらなくなっているのに、大慌てに慌てます。他のに着替えようと思って出してみると、どれも指一本分ほどきつくなっています。「体がむくんでしまったのかな、茸のせいかしら。」なんて口走っていると、「あり得るよ。よく食べたものね。」周りも深刻そうに眉をひそめます。これはもちろんグルです。自分の想像力に負けてしまって、だんだん顔色が青ざめてきます。ガウン姿でミサに出るわけにもいけないので、部屋でお祈りを唱えているうちに、腹が決まりまして、20歳を前にしてキノコの食いすぎでお陀仏というのも乙な最期というべきか、とうそぶくを見て友人が、「まだその前に一服毒消しを飲んでみるという手もあるよ。処方を書き出してみるからね、」とさらさらとしたためて、手渡した紙には、「よく切れる鋏にて、汝の胴着をほどくべし。」と書いてあった。

もう一つは文学論争というほどのものじゃないけど、詩を作ってみんな歌比べみたいなことをして遊んでいたのですね。その中に『朝の美女』《La Belle Matineuse》という詩がありまして、マールヴィルが作った三篇のうちのどれが一番いいかという話をしていました。ヴォワチュールも自分はこんなのがいいと作ってみせたのです。ところがその時に侯爵夫人は、ヴォワチュールが得々として自賛したこの詩の原稿をこっそりと盗んで、手持ちの古い詩集と同じ字体で印刷させて、その中に綴じ込んでおきました。数日後にこの詩集をさりげなくテーブルの上に拵けておきますと、ヴォワチュールが何の気なしにそれを取り上げてページに目を通します。そこには自分の最新作とそっくりな一篇の詩が載っていたので、我が目を疑い、読み直してみるのですが、まぎれもなく自分の詩と同じです。さては無意識の記憶か、偶然の一致か、と肝を冷やしますが、すぐにトリックに気づいた。密かに復讐を誓った彼は、往来でジブシーの熊使いを雇ってきます。貴婦人たちがサロンでいつものように談笑している昼下がりには、衝立の上から二頭のケダモノの頭がヌッと現れます。お客は金切り声をあげて、長い膨らんだスカートをたくし上げてテーブルの上にのるわけですね。夫人は気色ばんで「一体全体どういうわけでここに熊さんが来たんでしょうね。」、ヴォワチュールは慌てずに、「ハイ、一体全体どういうわけで、新作の詩が50年も前の詩集に入っているのか知りたいものだと、熊さんは言ってますよ。」というような応酬がありました。まあ、そういうばかばかしいことが幾つも幾つも載っていて、それを見てるうちになんだか面白そうなことをやってる集団なのだとわかりました。

また時々、bonnes surprises と言うんでしょうか、「びっくりパーティ」みたいなものがありまして、規模の大きいところでは、一部屋増築して、そのことは誰にも知らせてない。外からも覆いを掛けてよくわからないようにしておいて、ある日客が集まってるときに大きなドラをガンと鳴らしまして、パッとタピスリーをはずしますと、その向こうに新しい部屋が現れました。

こういうのは、私どもではできない芸当ですけれども、そんなこともやって人々を楽しませていたようです。

それから文学史でも時々取り上げられるのは、『ジュリーの花輪』というアンソロジーで、これは有名なものですからその外側の装丁だけでもご覧になったことがあると思いますが、世界に一つしかない詩集ですね。当時はサロンに出入りする客一人一人が皆ものを書くのです。書く人と読む人がほぼ同数であり、しかも皆が詩を書くという非常に幸せな時代だったわけですね。そしてそのサロンにランブイエ侯爵夫人の娘でジュリーという人がおりまして、お母さんの片腕をやってるんですけれども、その人を讃えるために、彼女を花に例えて一人が何篇かずつ、花の詩を書いてくるように頼みます。これも長年ジュリーに恋をしていたモントーリエ公爵が発案したのですね。彼の企画によって出来上がってきた詩を、当代随一の絵描きに挿し絵を描かせ、当代随一の書家に字を書かせて、もちろん羊皮紙で、世界に一つしかない本をジュリーに捧げた。これは、実際には三部あって、一部は失われてしまったみたいですが、一部はビブリオテーク・ナショナルにあるはずだし、もう一つはジュリーの子孫のユゼス公爵夫人のところにあります（エクス・アン・プロヴァンスの博物館にあるらしい）。私は実物を見たことがありません。それはまあ、一種のオケーショナル・ポエムですし、詩としては値打ちがあるかどうか分からないですね。でも『源氏』にだって出てくるじゃありませんか、後朝の別れをしたあと、何か花の一枝に短冊をつけて、それに似つかわしい歌を一首添えて、お礼にやりとりするというのがありますね。また歌比べもあれば、歌合わせもあります。これは日本にだってもちろんあって、私は非常に艶冶なものを感じます。それらは、現代の詩の基準から言うと、最高の芸術品ではありません。本当にお祝儀詩みたいなものもあるのですが、言うに言われぬ美しい風情があったり、全部ではありませんが、本当に優しいと思われるような詩があります。

サロンというものが調べにくいのはなぜかと言えば、それは会話の楽しさみたいなものだから、会話というのは音楽と同じように消えてしまうものですからね。音楽は、今はいろんな手段でとどめられるようになりましたし、会話もそうかもしれないけれども、本当は、私は、会話の良さは、消えてしまうところにあると思います。だけでも、それは全然その後追跡できないかという、そうではない。手紙というのは一種の会話でしょ。時間差がある会話ですよ。手紙を調べていくと、そういうのが見つかるかもしれない。それでセヴィニエ夫人の手紙なんかを読みますと、やっぱり書いてありますよね、どんな風な会話を交わしたか。ただ、セヴィニエ夫人の手紙っていうのは、女の手紙ですからとぶんですね、あっちこっちにねえ。ここと思えばまたあちらで、ン？と思っていると全然違うことを喋っている。行も変えないで。注もあまり十分とは言えないですよ。あれこそ急ぎのない気持ちで読むと、これ以上楽しいものはないと思うんですね。論文を書いてやろうとか、まとめてやろうとか、そんなことじゃなくて、私もう、早く定年になりたいわ。ああいうのは、時間制限なしで、本当に毎日、三昧境に入りたいですね。もちろんそれで何か見えてきたものがあつたら、時々、こういうことがわかりましたよ、なんて報告するのは楽しいです。あまり人の役に立つとは思えないけれどもね。そういうのを見ていきまして、会話あるいは詩、それからお手紙、メモワールに出てきてるやりとりを見てますと、どうやらその時

代のキーワードというのは、本当に *plaire* なんだな、と思います。これは、フランス文学に連綿としてあると思うのね。そんなことを言えば、汚いことを書いてるセリヌなんかはどうかと言えるけれども、彼の中にだってあるじゃないですか、もうあんなにキツナイことを書いてるのね、優しいところがありますよねえ。ジュネだってそうじゃない。あんなに糞尿にまみれたようなことを書いてるんだけど、どこかしらやっぱり泣かせるところがあるのに気が付きますよね。それが私たちに訴えてくると思うんです。それでその *plaire* という言葉は、本当に17世紀のキーワードになるなあと思っているんです。ことに演劇なんかそうですね。ここに赤木先生がいらっしゃるんですけど、赤木先生が『フランス演劇から見た女性の世紀』という17世紀の演劇のことを書いて下さいましたし、それから倉田信子さんね、あのかたがまた、『アストレ』だとか、スキュデリ嬢のあの長くてどうしようもない『グラン・シリユス』や『クレリー』を、まあとにかく全部読破してねえ、それについて書いてくださった。そういう方がぼつぼついらっしゃるの、このごろは17世紀も大分心丈夫になってきたんじゃないでしょうか。

それで、18世紀のサロンというのは、たまたま柳谷大兄がやっていて下さいまして、「うまいこと配分したなあ」って、いま加藤林太郎先生に言われたんですけど、配分したっていうより一緒に翻訳などして、私は17世紀にしか手が回らない、18世紀はあなたやってなんてことで、大兄もしこしこと書いていますよね。あんな分量になったんだからもうじき本にまとまるだろうと楽しみにしてるんです。これも日にちは予告できないんですけど、前宣伝しておきます。ただ私、本を書いたときにつくづく思いましたのはね、紀要に書いておいて、それをまとめて発表する形をとろうとしたんですよ。そうしましたらね、親しい編集者に言われました、「紀要の文というのはあなたね、全読書人口の0.3パーセントの人しか読まない。それをそのまま本にされても、定年の時にね、お赤飯代わりに配る本にしかないよ。」それもそうだなとも思いますね。私は何が苦しかったかといって、次々と書いていってもね、本のかたちにまとまるまでは、人目にさらしてはだめだってその人はおっしゃるんですね。やっぱり書き下ろしの原稿ほど魅力的なものはないんだから、そこまで書いていたんだらそうしなさい。はじめ500ページ書いたんですけど、そんな長いもの誰が読むもんですかとおっしゃるので、300ページに縮めたんですよ。すると、ですます調ではとろとろ流れて気持ちが悪いから、もっときちんとした形になさいとおっしゃるのね。いったい何度書き直したかしら、それよりもやってるやっているといいながら、いつまでも形にならないわねなんて、我ながらそれがつらいのよ。なにもやっていないのと同じなのよ。まあ外見はどうでもよろしいけど、自分が焦るわけですよ。もうこれは困ったもんだと思ってたんですよ。それで柳谷大兄の18世紀のサロンは立派な文過ぎちゃうから、「今度本にするときにはもっと砕いちゃって、もう定年は過ぎたんだし定年のお祝いっていうんじゃないから、安心してね、ゆっくりね、そういう風にしたい方がいいよ。」ていうんですけど、読む側にも物理的なきつさというのがあるんですね。あんまり長いとダメだし、あんまり一つの話が小見出しなしに続くのはきついですね。これは内輪の会だからこういう馬鹿な話も恥のうちと思っていました。

話を戻しますと、私は会話というのがサロンの魂そのものであろうという風に考えるわけです。

その会話とか対話は何であるかという、いま流行りの観光教科書のバカ本ではダメなんですね。ああいうのは会話っていわないのよ、私に言わせると。やっぱり意見を交換することだと思うんですね。こんにちは、さようなら、コーヒーどうですか、ではだめなんだろうな。初めはしかたないけど、それで終始してはダメだろうな、と思うんですね。結局楽しみのうちに、啓発しあうこと。plaire だと思って読んでいると、知らないうちに教化される、ラシーヌの序文にだってあるし、モリエールだってそうだし、みんなそういう風書いている。17世紀から現代にとぶってというのは無茶かもしれないけど、基本は変わらないだろう、という風に私は考えるんですね。今なおフランス人は、何をやっててそんなに面白いのかと思うくらいによく集まるし、よくお客するし、よくお客に行くし、集まると必ず話をして、晩御飯を7時から始めて延々と12時頃まで飲んだり食べたりしながら、夏なら表で木の下でやってるわけですね。冬なら暖炉のそばでやってる。それは本当にたわいのない楽しい会話ではあるけれども、ちょっと毒のあるのもそうでないのも、それを貫いているのは、一種の教養主義ではないかと考えるんですね。伝統として教養主義は存在するんですね。スキュデリー嬢は盛んにそれを発信してますよね。あの人はちょっとお説教っぽいところがあるけれども、やっぱり読み直してみると、本当に真面目で一生懸命やってるんだと思うんですよ。

実は「17世紀フランスのサロン」の中に、恥ずかしながら、孫引きした所が一カ所あります。それは17世紀の前半に出てきた人で、パール・デュボスクというお坊さんの文ですが、この人の *Honnête femme* という題の変な本が有るんですね。honnête homme っていうのは聞いたことがあるけれども、honneste femme はその女性版なんです。honnête homme というのは知らない人はいないけど、honnête femme はそれに匹敵する女紳士というかしら、honnête homme はなんて訳したらいいかわからないけれども、良識有るジェントルマンみたいなことなんでしょう。1632年ですね初版は。重版されて、この本が全部で何版まで出たのか私はまだ調べきらないけれども、初版はB.N.にありました。第四版の一番初めに『読書について「De la lecture」』という章がありまして、そこにすばらしい文があります。「読書と会話と瞑想の3つ以上に美しく有用な事項はない。読書によって我々は死者達と交流し、会話によって生者と交流し、瞑想によって自分自身と対話する。読書は思い出を豊かにし、会話は精神を磨き、瞑想は判断力を養う。」というんですね。(モンテーニュの第Ⅲ巻に類似の考えがあることを永盛さんからこの後で教わった。) 最初はどこで見つけたんだろう、多分ラチュイエールか誰かだと思うんだけど、すごく気に入ってこれを使ってたんだけど、原典は恥ずかしながら当たってなかったのです。これはやっぱりいけないことなんだよね、と思い続けていて、なかなか調べられなかったんですけど、とうとう2年ほど前それを見つけだしました。その本はコピーがとれないので、行って写すしかないわけですけども、CD-ROM にも入っていません。まだ古い方のB.N.にあると思います。その本を読みますと、初めはこんな大きな版型なんですけれども、それが第二版の時はB6くらいになって、これ以降もこんな形で出ているところを見ると、これは心ある、字の読める女の人の枕頭の本だったのでしょね。三、四十年にわたって何回となく重版されているようです。それぞれ体裁を変えながら連綿と読み継がれていた本みたいなんです。そして、THEODORE

JORAN : *Les Féministes avant le féminisme*, 1935 『フェミニズム以前のフェミニストたち』の一卷に、やっぱりその本のことが載ってまして、女性を啓蒙しようと思ってたことが書いてありました。数ページの短い紹介でしたけれどもね。やっぱり目を付ける人はどこにでもいるものだなあと思いました。

私は、教養主義というものが、本当に今の日本に一番欠けていると思うんですよ。何でそうなるのか。もちろん相続税の税法なんかも違うし、本当にお金がないんですね。暇がないし、いろいろ追われてるからできないと思うんだけれども。まあ、この頃話題の雑誌記事によると、東大の法学部が一番それがひどいらしいんで、団塊から続いて教養が欠如しているってことを指摘したら、学生から「教養とは何ですか。」と質問があつて、まあ、的はずれた質問じゃないかもしれないけれども、人に教えてもらって、「じゃあ今日から教養つけよう。」という話でもないんで、そんなことを質問すること自体恥ずかしいね、と思うのね。「自分で考えたら。」と T 氏が言ったら、東大の学長が怒って、自分でも答えられないのに言い立てるとは、とまたまた巻き返してね。まあ、雑誌ネタなんか好きじゃありませんけれど、たしかに教養主義の伝統が欠如しているのではないかと考えるのです。

さて、二本目の柱のことになりますが、あんまり時間がないので、こっちの方は端折ってお話ししようと思います。二本目の柱というのは、私にとって詩を書くとはどういうことか、という全く別のテーマなのでですから一度に話すってのはどうかと思いますけれども、同じ一つの人の中で、片方でサロンのことをやっていて、どうしてもう一つは詩になるのかという疑問もあろうかと、少しお話しします。非常に個人的な問題ですね、詩を書くってのは。ですから、ここで話すのが適切かどうか分かりませんが、実は私は、今までに五冊の詩集を出していて、五冊目の時は *bilingue* でフランス語のを別冊で出しました。自分で翻訳して出したんですが、今六冊目をまとめていて、今年中に出す予定です。その六冊目も別冊でフランス語訳を付けようと思ってるんですね。本当はそんなこと自分でするってのは恥ずかしい話で、本当にいいものを書いておけば、必ずひっくり返る日が来るだろうと思うんだけど。実際にひっくり返ったものを見てみると、私、非常に不満なんです。例えばボードレールなんか、斉藤磯雄さんの訳と鈴木信太郎さんの訳と、それから福永武彦さんの訳なんか見てみると、まあ、本当によくも同じ詩をこんなにいろいろにできるもんだなあとってしてしまう。例えば磯雄さんのは調べがあるけれどもあまりに古風だし、信太郎先生のは、あるものは新古今の世界ですよ。それから福永さんは、ボードレールの使ってる語彙の水準から言えば、一番近いかもしれないけれども、でもその調子は何となく深夜放送のディスク・ジョッキーみたいなのが気に入らないんですよ。そういうことにはなりたくない、私は。自分の作品がよくたって悪くたって、訳されたときにね、ちょっとやっぱり違うのよねと、化けて出たくなるようなのをやられるんじゃないかなわないから、拙くてもなんでも私がやりましょうと。今回は非常に優秀な訳者に恵まれてはじめてのですね。ところがね、優れてはいるんだけど、まあ、教養がありすぎるんですよ。「詩というのは、韻文でなきゃならん。韻文でないものは詩ではない。」っておっしゃるんです。こんなに散文詩の氾濫している時代でもね、そういう風におっしゃるわけです。それはまあ仕様がなないとは思いますが、でも水が凍って氷

になりますと分量が増えますでしょ。韻のためにそんな感じでやっぱり増えるんですね。増えるも増えたわ四倍にもなるんですよ。一行をパラフレーズしながら四行にしちゃう。それでね、オードみたいにかトランが続くわけです。「ああ、これじゃあ、私じゃないわ。どう見てもね。」って。上手くたって下手だって、私じゃないものが出てくるのは、まずいんじゃないかと思いますよね。そういう風な物理的な形式の問題以外に、翻訳に関する（日本語をフランス語にするとき、フランス語を日本語にするときの）問題点みたいなものは、語学教師として何としても無関心ではいられないですよ。皆さんも、もしかすると興味がおありかもしれないと思って、お話をしようと思います。

言葉だけがどうひっくり返るかという問題だけではなくて、テーマそのものに日仏の相違が現れて来ますね。実は私は二年前に母を亡くしました。そして、その後はどの詩にも母の幻が出てまいります。フランスの詩の中でお母さんが亡くなったときの詩って言うのが何処かにあるかしらとさがしたのですけどないんですね。母親を亡くしたときの詩っていうのはないんですよ。少なくともね、平凡社で出ている世界名詩集大成の中のフランス篇の4巻本、その中に一つもない。子どもを亡くしたのは有るんですね。マルスリーヌ・デボルド・ヴァルモールがいるし、ユゴーの有名な« Villequier »が有るしね。子どもを亡くしたのはあるのよね。「母さまのない子供達に」というのも有るんですが、お母さんの死をうたった詩ってのはなくて、「どうしてかしら、フランス人はお母さまを愛さないのかしら。」なんて馬鹿な質問をしたら、「そういう問題ではありません。」そのひとがおっしゃるには「ボーヴォワールの中に、« La mort douce »というのがあって、それが唯一私が知っているもので、ほかに詩では、そういうのはないなあ。」と、何でも暗唱していらっしゃる方なのに、そうおっしゃるんです。そのテーマがないって言うのは、ほんとに不思議ですね。びっくりします。

それから色彩についての考え方も違います。私の母が亡くなったのは夏だったんですけどね。それまで毎週日曜日には必ず病院に行くことにしていました。日曜日はカレンダーは赤い字で書いてありますね。ところがその日は赤い字の日なんだけども、「あ、病院へ。」と思ったらもう母はいない、庭を見てると、丁度夏ですから、ペチュニアの赤と白のしましまの花が、風が来る度にそよいでるんです。その景色を書いたんです。そしたらね、「ペチュニアという花が私は嫌いだ。」とおっしゃるのね。「なぜ？」と聞いたら、「pétunerという言葉が字引の隣にあるはずで、pétunerというのは、嗅ぎ煙草をフンフン、クシャン、とやるあれなんですよ。花の名前のペチュニアは並んでいるから、それを連想しないフランス人はいないよ。」というんですね。「困ったなあ。でもペチュニアが揺れてたんですもの。」っていくら言っても、「嗅ぎ煙草はかなわないなあ。」でそれは譲ったんですけど。じゃあ何にするかですよ、問題は。するとまた、詩に歌える花と歌えない花がある、といい出すわけね。「韻のなきもの詩にあらず。」という考え方と同様で、「じゃあ、何になさるの。」といったら、「いいのができたよ。」って。見たら、百合と深紅のバラが、祭壇の上にもり上がって飾ってあるんですね。「私の母は、つつましい日本の女でありましたから、そんなね、ミッテランの葬式みたいな祭壇がね、目の前にどかっとなっちゃぶちこわしよ。」って言ったんですけどね、譲らないんです。「百合が白い花の中では一番詩に歌われてよい花。次は赤い

バラだ。」私が赤と白の組み合わせにこだわるのは、赤と白には日本ではめでたいイメージがあって、花札の一月だってそうでしょ。私は母のエレジーを書くのに、ほんとに陰々滅々としたのは書きたくないわけです。89で天寿を全うした母は、寝ついてから初めの十年ぐらい、家でみてたわけです。だから亡くなったときに紅バラなどでまつる、っていうんではなくて、悲しいんだけど少しはめでたい気持ちもあって、そしてそこに風にそよそよとそのささやかな花が揺れてるようなのがね、母に対するエレジーとして、はなむけとしてぴったりな気がしましたの。そのイメージが私の念頭から離れないわけです。それが百合とバラじゃね。こりゃあかな、と思って、もうやめましたの。私はフランスに行っただね、お友達の詩人なんかに見てもらいました。「こんな風になってね、もう、困った困った。」って言ったらね、「何であんた自分がやったのをもってこなかったの。」「自分で訳したのここにあるよ、だけだね、下手だからねえ、困るんだけどどうかしら」と言ったら、「あのねえ、その下手上手は別としてこっちの方がずっといいよ」って百倍もいいって言い方をするから、やっぱりそうか……それで冠詞がおかしいとか、平仄があわないなんてそこは直してもらおうと思ったんですね。そういうごたごたを話したいわけじゃないけれども、例えば色彩一つとってもね、赤と白には何もめでたいイメージはないって言うんですよ。お葬式にも赤い花使うしね、なんかお祝いだったら白い花使うしね、じゃあどういう色ならめでたいの、ったら「ピンクだな」って言うんですね。ピンクねえ、ちょっとなあ、89で死んだ人にピンクの花、どうかしらそれ、あんまりね、ピンとこないですよ。ですから色彩についての感じ方でもね、ほんとにその、死ぬということについての感じ方も、それからエレジーというものの感じ方も、定型の感じ方にしても、非常に根源的に日本の考え方とフランスの考え方は違うんじゃないかということを、本当にもう六十も過ぎて、まだまだびっくりしたなっていう感じでしたの。

もう結論にしますけれども、ここにありますのはその、5冊目の詩集で仏訳は「エフェメール」となっています。日本語は「立っている青い子供」となってます。これは私の名前を分解した形です。で、この「エフェメール」というのは言葉遊びになっておりまして、「エフェ」というのが効果 (effet)、「フェ」なら事実 (fait) とか仙女 (fée) というのもあるし、「メール」というのが母 (mère) なわけですから、お母さんの事実で、内容にぴったりな題だと思うんです。(友達が考えてくれました。)

ここで、詩を書くことと私が一体どういう位置関係にあるのかということをお話しますと、一言でいえば私たちは、物事のリアリティと自分の主観とのせめぎあいみたいな形で生きてるわけで、社会と自分とか、何でもいいんですけども、食うか食われるかだったり、両方立てながら何とかやっていってるわけですね。で、それだけだとほんとに苦しくてしょうがないです。私は自分の主観がリアリティの中でもう食われそうになって、私の場合のリアリティは、親子関係ですけども、親子っていうのはなかなか苦しいもので、両方とも無茶を言い合うのですから、こっちにも半分ぐらい責任があるわけですけども、そういうやりきれないもんだと思うんですね。本当にその中でおぼれそうになって、乗っ取られそうになって、つぶれそうになるわけです。そうすると、どこか自分を客観化するするためのもう一つの地点が必要になります。その地点は大きくな

くてもいい。最低限私の足の裏二つあわせた広さくらいがあればよろしいわけで、岩登りに例えれば、岩棚みたいなものでもいいんです。考えてそうだったんじゃないけど、自然にそうやってきていて、後で考えてみると、そういう説明が付く、といった方がいいんじゃないでしょうか。まず私と現実があって、その上か下か知らないけど、詩があって、そこに遊びに行って、足の裏二枚分の所に立っていると、レアリテと私自身を見おろすことができ、そこで客観化するということが出来、どうやら私にとって詩というのは、考える手段であって、経路でもある、というようなことに気が付くわけです。そんな難しいことではなく、何か自分を笑うことが出来るような立場をとれることになると思うんですね。それがおそらく、私が詩を書いている、もし説明をするなら、そういうことなんです。どうも長い間ご静聴ありがとうございました。